

LOP67

Lausanne Occasional Paper: Jewish Evangelism

ローザンヌ運動特別報告書 67 ユダヤ人伝道

本 PDF は、現在インターネット上に公開されている文書の目次の部分訳です。「はじめに」にも紹介されている 2004 年の旧バージョン LOP60 は、近藤宏子氏の翻訳により 2006 年に関西ミッション・リサーチ・センターから出版されました。LOP67 は、ユダヤ人伝道に関する最新情報をまとめた広範な内容となっています。現在のところ全文翻訳の見通しは立っていませんが、各章タイトルの下 [英語本文へのリンク](#) をクリックしていただきますと、対応する英文ページにリンクされます。

本文書の翻訳や、内容の不明点に関しては、LCJE 日本支部までお問合せ下さい。

LCJE 日本支部 (ローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会日本支部)

〒541-0041 大阪市中央区北浜 2-3-10 VIP 関西センター3F

電話 : 072-867-6721 FAX : 072-867-6721 E メール: lcje1226@gmail.com

ホームページ: <https://www.lcjejapan.com/> 郵便振替: 00950-4-25633

LCJE 日本支部では、東京、大阪、およびオンラインで月例の祈禱会を開催しています。どうぞご参加ください。

[英語本文へのリンク](#)

全体目次

- はじめに : なぜユダヤ人伝道なのか? (2022.5 翻訳済)
- 第1章 : ユダヤ人伝道の歴史 (2022.12 翻訳済)
- 第2章 : ユダヤ人コミュニティとユダヤ人伝道
- 第3章 : 神学的考察とユダヤ人伝道
- 第4章 : ユダヤ人伝道に対する 10 の反論への応答
- 第5章 : ユダヤ人伝道における戦略と実践
- 参考文献 : さらに学びを深めるために - リッチ・ロビンソン博士

はじめに：なぜユダヤ人伝道なのか？

1980年、「未宣教の人々への宣教」に焦点を当てたローザンヌ世界宣教委員会（LCWE／今日ではローザンヌ運動と呼ばれる）の会議がタイのパタヤ市で開催されました。この記念すべき会議の多くの成果の1つは、福音がまだ届けられていない民族の一つであるユダヤ人にその福音を届けようとするネットワークの誕生でした。このネットワークはローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会（LCJE）と呼ばれるようになりました。LCJEはローザンヌ運動内の様々なネットワークの中で最も長く活動しているネットワークです。

2004年、ローザンヌ運動は世界に福音を届ける使命に焦点を当てた別の会議を開催しました。この会議でLCJEネットワークのメンバーは「Lausanne Occasional Paper 60, Jewish Evangelism : A Call to the Church」（LOP60）という報告書を作成しました。その後、この報告書は、ユダヤ人伝道の重要性を世界の教会に知らせるために、広く用いられました。この文書では、使徒パウロの言葉である「私は福音を恥じていません。それは、信じるすべての人、最初にユダヤ人、そしてギリシャ人にも救いをもたらす神の力だからです」（ローマ1：16 私訳）を受けて、救い主であるイエスの福音をユダヤ人とすべての人々に伝えるように、世界の教会に勧めています。LCJEの主張は「イエスがユダヤ人のメシアでないなら、諸国民のキリストではありえない」ということです。イエスが世界の救い主であるなら、ユダヤ人の救い主でないはずはありません。

私たちがこの報告書を執筆した2020年はLCJEの40周年を迎える年でした。過去40年間、このネットワークを守ってくださった神の忠実さをどのように記念し、回顧していくかについて祈った結果、私たちはLOP60の改訂に取り組むことに決めました。2004年以来、世界が変化する速度は急激に速くなっており、ユダヤ人伝道における変化もその例外ではありません。LCJEが世界の教会の中で適切な声を発信し続けて行くために、私たちは聖書の時代から続く不変の召しを再確認すべきです。それは「すべての国民を弟子とする（マタイ28:19）」ことであり、それには当然、ユダヤ人も含まれるのです。

この長い報告をお読みいただけることに感謝します。あなたがこの文書を読んでいるのは偶然ではなく、むしろ、神の意志であると私たちは信じています。あなたはユダヤ人のミニストリーに精通しているかもしれませんが、ユダヤ人がイエスを必要としている、またはユダヤ人がイエスを信じているという話を聞くのは初めてかもしれませんが、神がこの報告書を用いてくださって、神の王国が進展し、神の御名に栄光がもたらされることを祈ります。

多くの人々がこの文書作成のために献身的に貢献してくださいました。このプロジェクトを始める時、可能な限り多くの人々に関わっていただきたいと願っていました。それは、

LCJE のネットワークの中の意見の多様性を反映すると同時に、私たちを一つ結びつけるものを明確化するためです。それは「イスラエルの失われた羊の救いへの情熱」です。各章に編集者を割り当て、LCJE 内のさまざまな見解を収集し、それらを 1 つの文章にまとめていただくように依頼しました。簡単な作業ではありませんが、編集者の皆さんは、すばらしい仕事をして下さいました。ご苦勞いただいた、アレックス・ジェイコブ牧師、トゥヴィア・ザレツキー博士、ダレル・ボック博士、リチャード・ハーベイ博士、スーザン・パールマン姉、リッチ・ロビンソン博士に感謝の意を表したいと思います。

私たちの祈りは、あなたがこの文書を読んで行動を起こされることです。どうか神がユダヤ人の救いのために祈り、執り成す心をあなたに与えてくださいますように。あなたは福音を必要としているユダヤ人をご存じかもしれません。もしそうなら、救い主イエスを通して人々に与えられた神の恵みを、その方と分かち合うことをお勧めします。ユダヤ人伝道に従事することは教会に与えられた召しです。私たちの働きによって、教会が行動を起こすことを願っています。

主の栄光のために

2022 年 5 月 18 日改

(日本語訳：田中身子和)

第1章：ユダヤ人伝道の歴史—アレックス・ジェイコブ牧師

Chapter 1: The History of Jewish Evangelism – Rev. Alex Jacob

[英語本文へのリンク](#)

本章ではユダヤ人伝道の歴史的な背景を説明します。次章からは、ユダヤ人伝道に関する多元的な議論に入り、ユダヤ人コミュニティとユダヤ人伝道（第2章）、神学的考察とユダヤ人伝道（第3章）、ユダヤ人伝道に対する10の反論への応答（第4章）、ユダヤ人伝道における戦略と実践（第5章）を取り上げます。

第1章はユダヤ人伝道に関する歴史的な概観です[1]。伝道は長い宣教の歴史の中に含まれており、また宣教は教会の歴史の一部となっているため、ユダヤ人伝道の歴史は大きな主題です。教会史は二千年以上にも及んでおり、ミッシオ・デイ（神の使命）という大きくて重い任務を担って、それに参画した教会が、世界のあらゆる地域に影響を与えました。しかし、本章では初代教会に重点を置き、伝道の基本原則を考えつつ、ユダヤ人伝道の基本的な特徴を明らかにします。それは、さらなる祈りと共に歴史的研究と神学的考察、実践のための有用な「足がかり」を与えるためです。

イエスの伝道と初代教会の伝道実践

ユダヤ人伝道は歴史的、神学的に言って最初の伝道の領域であり、それは後に教会によって行われる、あらゆる伝道の取り組みを生み出した出発点です。イエス（ユダヤ人の信仰共同体では一般的にイエシュアと呼ばれている）が最初に弟子たちを召された時、その召しには弟子としての自覚とイエスの証人となることに明確な焦点がありました（マタイ 4:18-19）。さらに、イエスは地上での活動を終えるにあたり、再びすべての弟子たちに宣教を呼びかけられました。（マタイ 28:18-20）

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」 [2]マタイ 28:18-21（新改訳）

伝道の歴史において「大宣教命令」と呼ばれるこの教え（召命）は、何世紀にもわたって教会の使命と働きを形作り、力を与えて来ました。ここから、イエスの証人となることの重要性を知り、また「伝道命令」が、どのように聖書に根差し、教会の実践によって展開して来たかを学ぶことができます。

ユダヤ人に福音が伝えられて教会が始まり、間もなく宣教は世界に広がって行きました。教会史の初めは、「ユダヤ人のキリスト教」しかありませんでした。福音のメッセージはユダヤ人の聖書の世界に根ざしており、イエスはユダヤ人であり、使徒たち（そして生まれたばかりの初代教会の共同体も）は主にユダヤ人を対象に活動しました。彼らの働きは「素晴らしく新しい」画期的な変革であり、過去との断絶、新時代の幕開け、来るべき王国の新たな現実として宣言され、示され、確立したのです。しかし、イエスの教えと新約聖書の広範囲の教えからは、別の側面も見るができます。それは、福音のメッセージが神の忠実を示す継続的な啓示の延長線上にあることです。イエスの働きは神の約束と預言に根ざしており[3]、神の忠実はイスラエルとの契約の歴史から、さらに天地創造の時にまで遡るものなのです。

福音書に記されたイエスの宣教活動は広範囲にわたる重層的なものですが、簡単に言うと、彼は神の国を宣べ伝え[4]、イエスの弟子となるように人々を招いたのです。弟子の道には多くの段階がありますが、新約聖書は4つの段階、つまり①悔い改め、②イエスへの信仰（信頼）、③洗礼、そして④聖霊の人格的な働きを受入れる態度を強調します。

王国はメシアが「王」であるというメッセージであり、弟子の道はその適用でした。王国や弟子の道は、第二神殿時代のユダヤ教の歴史と神学的な文脈において、最も良く理解できます。[5]教会の第一世代のイエスの弟子の大多数はユダヤ人であり、使徒 6:7 と 21:20、ヤコブ 2:2[6]が断言するように、多くはユダヤ人の宗教的構造の中に根付いた人々でした。教会はこのユダヤ人の世界の中で生まれて成長を始め、新たにイエスの弟子となった人々は信仰深いユダヤ人としての正統性を主張しました。伝道はこのユダヤ的文脈の中で行われ「神の契約に対する忠実」というユダヤ的な聖書理解の中で理解されたのです。

しかし、伝道はユダヤ人の中に長くは留まりませんでした。イエスを信じるユダヤ人たちが聖霊によって力を与えられ、非ユダヤ人（異邦人）の間で証をし、イエスが与えた大宣教命令（マタイ 28:18-20）が実現して行ったからです。伝道者たち（そのほとんどがユダヤ人）はユダヤ人の世界を超えて福音を伝えた事で、彼らの伝道活動とイスラエル民族の不変の召命が結びつきました。それは、イスラエルが諸国民の光となり、神の救いを地の果てまで届けるという役割だったのです。（イザ 49:6）[7]。

「使徒の働き」は、宣教がエルサレムから始まり異教徒と異邦人世界の中心であるローマで使徒パウロが証をするところまでの記録です。それは、ユダヤ人の世界から異邦人の世界への架け橋[8]であり、続く新約聖書の書簡の多くの箇所は、「教会」の多様性が高まる中で一致を喜びつつ保つための諸問題を扱っています。それはユダヤ人と異邦人が共にイエスを主と仰ぎ見て仕えるためなのです。

教会がユダヤ教世界という枠組みを越えて拡大した時代について、歴史が明確に示しているのは、拡大の著しい速度と、その壮大な規模です。キリスト教の歴史家であり神学者である N. T. ライトは以下のように書いています。

初期キリスト教の最大の特徴は、目覚ましい速度で成長したことです。AD25 年には、キリスト教は存在せず、ユダの荒野に住む若い隠者と、夢を見たり幻を見たりする彼のいところのただけでした。ところが AD125 年には、ローマ帝国がキリスト教徒を処罰する公式な政策を定めるに至り、ポリュカルポスはすでにスミルナで半世紀もキリスト教徒でした。アリストイデスは（早い年代を受け入れるなら）ハドリアヌス帝に対し、世界には蛮族（未開人）、ギリシャ人、ユダヤ人、そしてキリスト教徒の 4 つの人種がいると告げていました。また、後に殉教者ユスティノスと呼ばれるようになる若い異教徒は、哲学的探求を始めて異教徒の偉大な思想家を巡っているところで、まだキリストに辿りついていませんでした[9]。

キリスト教とユダヤ教の「分岐点」とは？

初代教会が始まった頃、イエスを信じるユダヤ人の信仰共同体は、他のユダヤ人たちから（ローマ当局からも）ユダヤ教内の「一派」あるいは「運動」と見られていました。それは、イエスを信じるユダヤ人の多くが、ユダヤ教の重要な習慣や信仰を維持していた一方で、ユダヤ人社会の方でも多様なユダヤ人グループとアイデンティティが共存していたためでした。この多様性を表現するために、単一の宗教を意味する「ユダヤ教」（またはラビ的ユダヤ教）ではなく、当時のユダヤ教を「第二神殿ユダヤ宗教群」などと呼んだ方が良いかもしれません[10]。

ラビ的ユダヤ教とキリスト教が、制度的にも神学的にも別の宗教となるまでの道のりは複雑であり、「分岐点」となった瞬間や出来事があったわけではありません。使徒言行録にはすでにシナゴグで福音のメッセージが拒絶された記録があり、その後のエルサレム陥落（AD67-70）、バル・コクバの乱（AD135）に至る様々な展開の結果、イエスを信じるユダヤ人（および教会）とラビ的ユダヤ教との境界線はより明確に、広く認められるようになりました。教会の信徒たちが「より異邦人的」になるにつれてイエスを信じるユダヤ人の正当性を認めなくなった一方、ラビ的ユダヤ教の方でもユダヤ教の信仰と実践を再定義し、イエスを信じる人々の正当性を拒否し始めたことで、その分裂は拡大し、溝は深まったのです。

その結果、教会は聖書のルーツや新約聖書の実践からますます離れるようになりました。福音の真理と美しさは、2世紀以降の思想と実践の型にゆっくりと流し込んだかのように微妙に変形され、キリスト教はユダヤ人の生活とは異質のものとして再定義されたのです。そ

これは、教会とラビ的ユダヤ教との間の「アイデンティティ争い」に基づく対立の激化をもたらした。聖書の啓示の真の保持者は誰か、誰が真に「神に選ばれた民」なのかをめぐる、多くの議論と幅広い論争が（両者から）起こりました。迫害されていた教会は、迫害する側に回り（コンスタンティヌス帝後の時代）、キリスト教が得た有利な新しい地位や権力は、キリスト教徒とユダヤ人の間に存在した相互の関係を変質させるように働きました。

「分岐」が起こった理由やその解釈をめぐるのは、多くの論争の歴史があります[11]。しかし、はっきりしているのは、最初はユダヤ人伝道が続けられ、ユダヤ人信徒たちも活動を続けていたのに、4世紀末になると、教会内でユダヤ人信徒がアイデンティティを保ち、共同体として活動した明確な記録が無くなってしまいます。つまり、教会とラビ的ユダヤ教の分離はほぼ完了したのです。キリスト教を標榜する教会はユダヤ教とは別の宗教とみなされるようになり、イエスを信じるユダヤ人信徒たちは誤解されたり、時には教会とシナゴグの両方から迫害を受け、疎外された集団となりました。

この「分岐」はユダヤ人伝道を新約聖書の原型から変質させる結果を招きました。教会がイスラエルに代わり「神の選民」となったとする置換神学の影響が強まった結果、ユダヤ人伝道の呼びかけは、まるで「宇宙人の叫び」のように、誰も聞かなくなってしまったのです。置換神学が発展した背景には多くの要因がありました。ヘブライ的世界観からギリシャ的な思考方式への移行、反ユダヤ的な意図、そして権力の悪用などです。そして「イスラエルの希望」は捨て去られて行きました。それにもかかわらず、イエスを信じるユダヤ人信徒たちは教会の歴史のどの世紀にも見られました。彼らの存在は、教会とシナゴグの双方に、神の忠実を認識させる証しとなったのです。

新たな始まりと召命の更新？

宗教改革は、教会の一部に、聖書の教えに対する愛と献身を呼び覚ましました。クリスチャンが聖書を（多くの場合に初めて母言語で）読んで、その聖書のメッセージに思いを巡らせるようになり、精神と心が様々な面で刺激を受けたのです。明白な召しを受け、新しく力強い方法で伝道と幅広い宣教に従事する人々が現れました。その中で、諸国民の間に散らされたユダヤ人に福音を伝える動きも起こって来たのです。彼らのユダヤ人への関心は、しばしば親ユダヤ主義（philosemitism：反ユダヤ主義の反対語）を伴っていました。その核心は、ユダヤ民族が生き残り、再生し、回復することが御心だとする神学的信念だったのです。

ユダヤ人に対する新たな関心とその根底にある親ユダヤ主義を、全ての宗教改革者が本質的に、あるいは共通して持っていたわけではありません。マルティン・ルター（1483-1546）がユダヤ人に対する批判論[12]を展開したのは、驚くべきことではないのです。宗教改革の

歴史と神学書の多くがユダヤ人問題（およびそれに関連するキリスト教の問題）、ユダヤ人のみに焦点を当てた伝道、「イスラエル中心」の終末論などに無関心だったのです。

それでも、親ユダヤ主義と、聖書の継続的な学びは、一部のクリスチャンにユダヤ人国家の回復を祈り求める気持ちを起こさせました。ユダヤ人国家の回復というビジョンは、アンドリュー・ウィレット（1562-1621）、トーマス・ブライトマン（1562-1607）、ピエール・ジュリユー（1637-1713）といった初期の改革者たちの著作や説教にはっきりと見て取ることができます。ブライトマンの著書『彼らは再びエルサレムに帰るべきか』は、彼の死後8年目に出版されましたが、それは聖書の言葉が成就してユダヤ人が聖地に帰還すると、強く主張する内容でした。その主張は先駆的なもので、キリスト教界に広く大きな影響を与えたとされています。

ユダヤ人伝道と、イスラエル回復（主に聖書的終末論的の特定の文脈における）は「基本的な二本の柱」として、多くのプロテスタントのクリスチャンが新しく始めた、ユダヤ人宣教の運動や組織を支えるものとなりました。先駆的な取り組みがドイツで行われましたが、敬虔なルター派とモラヴィア派のネットワークが活用されました。1656年、エストラス・エドザード（1629-1708）はハンブルクで、ユダヤ人に対するキリスト教教育、弟子訓練、実践的支援を目的とする宣教活動を開始しました。この活動はフィリップ・ヤコブ・シュペーナー（1635-1705）やアウグスト・ヘルマン・フランケ（1663-1727）など、後のルター派宣教師たちに影響を与えました。

1728年にハレ大学でユダヤ研究所（Institutum Judaicum）が設立されました。この先駆的な宣教研究所は印刷部門の設置、イエスを信じるユダヤ人への牧会的・実践的支援、巡回するユダヤ人伝道者の任命と支援という3つの主要な目標を掲げていました。この研究所は1791年に閉鎖されましたが、その後の多くのプロジェクト、たとえば、ヨーゼフ・フレイ（1771-1850）が宣教を学んだベルリンの神学校などを生み出す契機になったと評価されています。ヨーゼフ・フレイは、元の姓はレビで、ラビの息子でしたが、1798年にイエスを信じるようになった人物です。彼は1809年にロンドン・ソサイエティ（London Society for Promoting Christianity Amongst the Jews/LSPCJ）を創設した人物です[13]。

この時代のもう一つの重要なユダヤ人伝道活動は、オランダで1738年に始まったもので、それを開始し、指導したのはヨハン・ドーバー（1706-1766）でした。彼の活動は歴史的、神学的に重要なもので、『モラヴィア教会史』[14]にある以下の紹介文から、その活動内容をうかがい知ることができます。

・・・ヨハン・ドーバーはヘブライ語の達人でユダヤ人のあらゆる習慣に精通し、ケーニヒスベルクの教授就任を要請されていました。しかし、東洋学者としての榮譽を得る

よりも、アムステルダムユダヤ人街に質素に住んで、友人のユダヤ人たちに彼が深く愛していたキリストについて話す道を選びました。彼の宣教の方法は参考になるものでした。ユダヤ人の友人たちに、いきなり教理や神学を説くことはせず、キリストが預言されたメシアであることを証明しようとしなかったのです。彼はイエスが死からよみがえったこと、よみがえったイエスがこの世でどれほど多くのことを行ったのかを、親切に説明しました。そして、ユダヤ人たちがパレスチナに集められるという希望を語ったのです。彼は「改宗者」を作ったと自慢することはできませんでしたが、ユダヤ人の友人にとっても愛され、「ラビ・シュムエル」と呼ばれたのです。

「ユダヤ人のキリスト教」の再出現

新しく興った伝道団体や関連する様々な機関、組織を調べてみると、スタッフの中でイエスを信じるユダヤ人の割合が高く、重要な指導的役割を担っていたことがわかります。この数は19世紀を通じて著しく増加しました。[15] この時期の他の貢献者は、ヨーゼフ・フレイの他に、英国国教会司教マイケル・ソロモン・アレクサンダー（1799-1845）、宣教師ジョセフ・ウルフ（1795-1862）、神学者アウグスト・ネアンデル（1789-1850）、詩人アイザック・ダ・コスタ（1798-1860）、聖書学者アルフレッド・エダースハイム（1825-1889）、宣教師フェルディナンド・エヴァルト（1802-1874）、宣教師ヘンリー・アーロン・スターン（1820-1885）、宣教師ジョン・モーゼス・エップスタイン（1827-1903）、作家、雄弁家、宣教師パウルス・カッセル（1821-1892）、上海の聖公会司教サムエル・アイザック・ジョセフ・シェレシェフスキー（1831-1906）、聖公会司教アイザック・ヘルムース（1819-1901）、説教者ミルザ・ノローラ（1855-1925）、講演者デイヴィッド・バロン（1855-1926）、宣教師レオン・レヴィソン（1881-1936）、神学者アーノルド・フランク（1859-1965）などが挙げられます。[16]

宣教団体の中に、イエスを信じるユダヤ人の割合が比較的高かったことから、既存の教会機構や宣教組織の中で（あるいはその枠を超えて）、独自の「ヘブル人クリスチャン」としてのアイデンティティを確立することの可能性や、その是非に関する議論が生じました。この議論は、イエスに対する信仰と、ユダヤ人であることとは両立しないという考えを強く持っていた、当時の教会とユダヤ人共同体の双方に変化を迫るものとなったのです。ヘブル人クリスチャンのアイデンティティの胎動は、1813年にロンドンで開かれたベニ・アブラハム（アブラハムの息子たち）の最初の会合までさかのぼることができます[17]。新しく生まれたヘブル人クリスチャン運動の中の多くの人々は、イエスを信じるユダヤ人としてのアイデンティティを包括的に捉えて、既存の教会と融和的関係を持とうとしましたが、中にはより分離的（あるいは独立的）な方向に向かう人々もいました。

完全なヘブル人クリスチャンのアイデンティティというビジョンを提唱した人々は、民族的にユダヤ人の信徒が、神学的、典礼的、制度的にも一般の教会から独立して、ヘブル人クリスチャンの共同体を作ろうとしました。独立することで、ユダヤ人クリスチャンは自分たちの民族の習慣に忠実であり続け、自分たちの信仰に基づく新しい典礼的・神学的表現を創り出し、他の様々なユダヤ人グループと密接な関係を自由に築くことが可能になると、彼らは主張したのです。これは、新しいユダヤ人伝道活動の重要な手法を生み出す可能性がある動きだと考えられました。この新たなビジョンの中から、宗教的、共同体的生活のさまざまなモデルが生まれ、それが今日のメシアニック・コングリゲーションにつながる原形となったのです。

このビジョンを新たに確立しようとしたユダヤ人信徒たちの大多数は、伝統的なユダヤ教の宗教的家庭の出身でした。彼らは召命の中心として、2つの優先事項を認識していました。第一はユダヤ人への継続的な福音宣教、第二はイエスが復活のメシアであり、神の永遠の御子であるという信仰の宣言でした。もしイエスがユダヤ人のメシアでないなら、彼は諸国民のキリストではない、という深い洞察がその核心にありました。この新しいビジョンに勢いを与えた、複数の要因を列挙すると、ユダヤ人伝道の相対的な「成功」[18]、多くの異邦人クリスチャンたちからの継続的な支援[19]、キリスト教シオニズムの成長、エルサレムにおける近代初のユダヤ人司教区の設立などです。この時期の重要人物は、牧師リドリー・ハイム・ハーシェル（1807-1864）、翻訳者スタニスラウス・ホーガ（1791-1860）、宣教師ジョセフ・ラビノヴィッツ（1837-1899）、牧師カール・シュワルツ（1817-1870）、神学者ポール・フィリップ・レバートフ（1878-1954）など。また、ユダヤ人が伝統から解放され、世界でユダヤ人口が増加した時代であったことも要因の一つでした。

しかし、このビジョンの正当性をめぐって多くの教会で議論が交わされ[20]、反対者たちはこのビジョンの追求が非現実的で、教会の一致を損ない、ユダヤ人伝道の中心点から人々を脱線させると懸念しました。多くの教会グループは、ユダヤ人としてのアイデンティティよりも教会への忠誠を優先させるヘブル人クリスチャンと良い関係を作っていました。しかし、そのような場合、ユダヤ人のアイデンティティは、たいてい子供の世代で「失われる」[21]ことになったのです。さらに、教会内の一部には、律法の民族的な生活あるいは儀式的側面は、すべて福音の到来によって破棄されたという神学的信念を持った人々も存在しました。

ホロコーストとイスラエルの再建国

ホロコーストとイスラエルの再建国という2つの事件は、ユダヤ人のアイデンティティと自己認識の多くの側面に根本的な変化を引き起こしました。それらの事件はまた、クリスチ

ヤンの思考方式と伝道実践にも大きな変化をもたらしたのですが、それがユダヤ人伝道
分野にも影響を与えました。ユダヤ人とクリスチヤンの出会いは、いつもホロコーストによ
って、ある程度の影響を受け続けていると、多くの人々が考えています。

ホロコーストの現実を受けて、いくつかの教会のグループや宣教機関は直接的なユダヤ人
伝道から対話、相互学習、支援に重点を置いた宣教へと向きを変えていきました。旧約聖書
はユダヤ人に適用され、新約聖書は異邦人のためのもので、ユダヤ人の道（律法への忠誠と
ユダヤ人のアイデンティティーの維持を通して）と異邦人の道（イエスのメッセージへの個
人的忠誠と新約の賜物を通して）という二つの別々の「救い」の道があるとする二契約神
学は神学の再編によって度々支持され、それが極端な形のディスペンセーション神学と結
びついた例も見られます。この変化の結果、ユダヤ人伝道の重要性と有効性は教会内で多く
の人々にとって必ずしも明らかではなく、まして優先事項ではなくなっていることを覚えて
おくべきです。

イスラエルの再建国は、ユダヤ人伝道にも大きな影響を与えました。近年、ユダヤ人伝道で
最も大きな成長を遂げたのはイスラエルにおける新しい宣教の取り組みであり、その結果
としてイエスを信じるユダヤ人の数が増えたと言えます。具体的な数については度々議論
が起きますが、現在イスラエルには自らをメシアニック・ジューと定義する約3万人の信
徒がおり[22]、ほとんどがイスラエルのメシアニック・ジューの会衆（コングリゲーション）
に属しています。時に、会衆が他のユダヤ人団体（反宣教団体）からの敵意と迫害に直面す
る場合もあります。それらの団体は、会衆の法的権利を損ない、会衆生活の重要な部分を制
限しようとするのです。3万人という数は決して多いとは言えませんが、ほんの数十年前と
比べれば大きく増加しています。この成長の結果、ヘブライ語を話す最初のメシアニック・
バイブル・カレッジの設立（ネタニヤを拠点とする）など、多くの重要な出来事が起こりま
した。

チョーザンピープル・ミニストリーズの最高責任者であるミッチ・グレイザーは、イスラエ
ルとの関わりについて以下のように述べています。

イスラエルにおけるチョーザンピープル・ミニストリーズの成長は、この国の人口構成
の変化を反映しています。私たちはまず、特に1948年以降にヨーロッパ系ユダヤ人、
セファルディ系ユダヤ人に宣教しました。1970年代から1980年代にかけては、若者の
間で高まっていたアリヤー運動（ユダヤ人のイスラエルへの移住）のために宣教師を送
り、その10年間にロシア系ユダヤ人の移民の人々に伝道、会堂建設、子供キャンプな
どに重点を置いた活動を行いました。

2005年には、ジャーマン・コロニーの建物を購入してエルサレム・メシアニック・セ

ンターを設置しましたが、それが今もイスラエルの活動本部となっています。ベス・サー・シャロームと呼ばれるイスラエルでのチョーズンピープル・ミニストリーズで働く人々の中には、様々な国からアリヤーした人やサブラ（イスラエルで生まれたユダヤ人）がいます。

現在 24 名のスタッフがエルサレムとテルアビブでメシアニック・センターを運営しています。センターでは、聖書研究、指導者養成、福音伝道における関係づくり、特別な宣教イベント、ホロコースト生存者である高齢者の方々を支援するための慈善事業などが行われています。また、エルサレム、テルアビブ、ステロット、アシュドッドに食料配給センターがあります。

私たちは、テルアビブのダウンタウンに隣接する地域で宣教活動の地盤を作っています。ラマット・ガンはテルアビブ中心部では家賃が高すぎて住めない家族が多く住む衛星都市です。近くの同様の都市に住むイスラエル人の総数は 30 万人以上にのぼり、こういった地域は若い子供連れの家族や多くのロシア系ユダヤ人移民たち、そしてイスラエル国内での最初の入植者を含む「古参の人々」が混じって住んでおり、宣教の必要性が非常に高いのです。

2016 年にはラマット・ガンの人通りの多い商業地区に 1,600 平方メートルのオフィスを借り、現在はそこを改装してテルアビブ広域での活動の中心地としています。私たちは、聖書研究会、講座の公開、伝道カフェ、母親のためのグループ、子どもたちのためのミニストリー、そしてさまざまな人道支援活動を行っています。

ローマ人への手紙 11 章 25-29 節の約束が成就するまで、イスラエル国内での働きを継続し、拡大していきたいと考えています。

ジェーズ・フォー・ジーザスのエグゼクティブディレクターであるデビッド・ブリクナーは、イスラエルでの活動について以下のように述べています。

私がジェーズ・フォー・ジーザスの事務局長になったのは 1996 年でした。イスラエルにおいて公式な活動を確立する前でしたが、イスラエルの地元で活動することが重要な優先事項であると確信していました。1996 年の最初のビジョン・ステートメントで、私は次のように述べました。「かつて、ニューヨーク周辺には、世界のどこよりも多くのユダヤ人がいました。現在、イスラエルには 440 万人のユダヤ人が住んでおり、その人口は増え続けています。私たちはこの新しい開拓地に積極的かつ戦略的に進出していかなければならないのです。私たちのイスラエルの責任者トゥビヤ・ザレツキーは、最近のクリスチャニティ・トゥデイの記事でイスラエル人が他のイスラエル人に福音

を伝えるのが最善だと、雄弁に語っています。私はトゥビヤが正しいと信じています。私たちはイスラエル人を訓練して自分たちの民に福音を届けさせるべきです。私たちはゆっくり、慎重に動いてきましたが、今こそイスラエルでの活動にもっとエネルギーを注ぐべき時なのです」。

この目標を達成するために、私たちは熱心に活動を開始し、テルアビブに最初の事務所を開設しました。2002年にはイスラエルにおける正式な非営利団体（アムタ）の地位を獲得し、初めて地元生まれのイスラエル人であるダン・セレッドを責任者に任命しました。その後すぐに、イスラエルの旅行者コミュニティへの伝道活動「マッサ」を開始し、伝道活動を行うイスラエル人の訓練を始めました。また、テルアビブの南端にあるフロレンティンに購入した建物でトレーニングセンター（モイシェ・ローゼン・センター）を開設し、イスラエル人をフルタイム伝道者とすることができるように、ヘブライ語による訓練を開始しています。

2008年にはイスラエルの全12地域でサチュレーション伝道（注：地域を福音で満たす伝道方式）を実施する取り組み「Behold Your God Israel」を開始し、2018年には70名以上のスタッフ・ボランティアが参加した10本立ての多面的な伝道をエルサレムで行って、それが最高潮に達しました。このイベントは近代イスラエル国家独立70周年と重なり、私たちはエルサレムに2つ目のジェーズ・フォー・ジーザスの支部を開設することができました。現在、エルサレムには8人のフルタイム宣教師、テルアビブには25人のフルタイム宣教師がおり、管理スタッフも充実していて、インターンシップ・プログラムも活発に行われています。

2020年のイスラエルのユダヤ人口は700万人近くに達すると言われていています。そして、私たちジェーズ・フォー・ジーザスの全世界での活動のうち、イスラエルでの活動が最大規模のものとなっています。

イスラエルに焦点を当てることは非常に重要なことですが、他の多くの国々で行われている重要なユダヤ人伝道の物語から目をそらすべきではありません。例えば、世界のユダヤ人人口の大部分を占めるアメリカ[24]、イギリス、南アフリカ、オーストラリア、エチオピア[24]、旧ソビエト連邦時代の主要地域であった、特にウクライナ、モルドバ、カザフスタンなどの地域では重要かつ先駆的なユダヤ人伝道が行われてきました（今でも行われている）。ここ数十年で、これらの地域から多くのロシア語を話すユダヤ人たちがイスラエルに帰還（アリヤー）しているため、旧ソビエト連邦地区での伝道活動はイスラエルでの伝道活動にも影響を及ぼしています。

旧ソビエト連邦崩壊後にロシアで活動を行い、重要な役割を果たしたアビ・スナイダーは、以下のように述べています。

旧ソビエト連邦の崩壊はその地域に住むユダヤ人に福音を伝える前例のない機会となりました。私たちは、そこで福音に対して驚くほど人々の心が開かれていることを発見しました。神は確かな恵みによって人々が福音を受け入れる準備をされましたが、人間的に見れば、その背景には次のような要因がありました。まず、政権が崩壊して基盤となっていた信念体系が崩れたので、その空白を埋める必要があったこと。旧ソビエト連邦時代には宗教の禁止によって「禁断の果実」となっていた福音に手が届くようになったこと。そして、福音宣教が禁じられていたことで、西洋世界のユダヤ人が今なお受け継いでいるイエスに対する反感を、ロシアのユダヤ人たちは持っていなかったのです。

神は恵みにより、これらすべてのことを用いられて、イシュアが私たちの罪のために死に、よみがえられたという知らせを受け取れるように、旧ソビエト連邦崩壊後のユダヤ人たちの心を整えてくださいました。旧ソビエト連邦地域で育ったユダヤ人の心に生まれた信仰は、やがてユダヤ人たちの移住によってアメリカ、ドイツ、イスラエルへと波及しました。彼らは福音を携えて移住して行ったのです。今日でも、ロシア語を話すユダヤ人がいるところでは、旧ソビエト連邦崩壊時に蒔かれた福音の言葉が多くの実を結び続けています。

現代イスラエル国家の再建は、現在進行中のユダヤ人伝道の歴史に間違いなく大きな影響を及ぼしています。紙幅の関係で完全に分析することはできませんが、5つの重要な点は強調されるべきでしょう。

第一に、イスラエル国家の再建はユダヤ人伝道とユダヤ人国家の再興という2つの基礎的な支柱を持ち続けてきたクリスチャンの希望を深めるものです。聖書の言葉の成就として主がイスラエルの民を彼らの地に回復されたのなら、なおさら、主がメシアを通してご自分の民を霊的に回復されることも私たちは信じる事が出来るでしょう。

第二に、イスラエル国家の再建は、預言的聖句の読み方を変えます。例えば、イザヤ書 19 章は、預言当時の文脈だけでなく、終末論的文脈も含んでいます。イザヤ書 19 章に明記されたエジプトやアッシリアだけでなく、その他の国々でユダヤ人とイスラム教徒のために働く伝道者たちにも、この預言の言葉は励ましになるでしょう。イザヤ書 19 章で期待される宣教の成果の一つは、多くの「イシュマエルの息子（と娘）」がイエスを信じ、彼らの助けで多くの「イサクの息子（と娘）」がイエスの救いの信仰を発見することであり、また逆に多くの「イサクの息子（と娘）」も「イシュマエルの息子（と娘）」を助けるでしょう。

第三に、イスラエル国家の再建はユダヤ人伝道の焦点を変えます。イスラエルの地に住むユダヤ人の数がそれ以外の地に住むユダヤ人の総数を超えるのは二千年以上も無かったことなのです。以前は主にヨーロッパ（あるいは他の地域）のユダヤ人コミュニティへの伝道に重点を置いていたユダヤ人伝道団体は、イスラエルの地で活動する新たな機会や課題に忠実に対応し、人材や資金を再配置することが求められているのです。この再配置には、もう一つの潜在的な側面があります。それは、福音をイスラエルに「持ち帰る」のではなく、福音がイスラエルから発信される働きを支援することです。福音がイスラエルから「出て行く」ことは多くの点で新約聖書のパターンを再現しており、双方向に宣教が行われることは、重要な霊的・神学的意義を持っています。

第四に、イスラエル国家の再建は派遣される宣教師（およびその支援団体）と、それを受ける共同体の関係を变えます。（これは変わるべきです）。受ける共同体で、地元の人々の独立したメシアニック会衆が機能している場合は特にそうなり得ます。以前、宣教師は自分たちの「母国の教団、機関、支援者」から派遣され、後援を受けたプロジェクトのために派遣されるのが普通でした。しかし現在は、多くの地元のメシアニック団体が機能しており、独自の宣教の取組みを行っています。そこで、宣教師の募集、説明責任、資金調達などの実際的な問題と共に、もっと「霊的」な側面、すなわち宣教活動の価値観と期待する「成果」などについて、避けられない変化が起こっているのです。

第五に、イスラエル国家の再建という現実には、多くのユダヤ人に自分自身のアイデンティティに対する新たな自信を与えています。かつては閉鎖的で疎外されたユダヤ人社会の中で、ユダヤ人たちに忌み嫌われていた福音のメッセージが、民主的な世俗国家の中でイスラエル国民として暮らす人々にとって、探求に値するものとなる可能性があるのです。彼らは今や、陽光あふれるテルアビブの海岸や、福音書によればイエスの教えと伝道の中心地だった、現代の活気あふれるエルサレムに暮らしているのです。このような個人的な姿勢の変化と共に、ユダヤ人の神学・歴史学の分野からも「ユダヤ人によるイエスの再評価」と呼ばれる開放性が見られるようになってきました。しかしながら、この「開放性」を強調しすぎたり、福音に対する根強い反感を軽視したりすべきではありません。現代のユダヤ人の多くの環境、特に閉鎖的で信仰熱心な超正統派のコミュニティの中では、福音に対する反感は根強く残っているのです[25]。

ユダヤ人伝道の歴史は変えることができませんが、過去の成功や失敗から学ぶべきことは多くあります。今日、ユダヤ人伝道に携わる人々が反省し、場合によっては赦しを請うべきことが歴史の中には多くありました。誠実な反省の精神は、近年、様々な教会や宣教のネットワークによってユダヤ人伝道のテーマ（そして、ユダヤ人とキリスト教の関係という幅広

い問題) に対してなされた数多くの文書や声明に示されています。

以下は、そのような文書の例です。

(参考資料)

第二バチカン公会議 (1965 年) の「ノストラ・アエターテ」(Nostra Aetate)。

教会とユダヤ人、世界教会協議会信仰と秩序委員会 (1964-68 年) より。

イスラエル、人、土地、国家、オランダ改革派教会シノドス (1970 年)。

教会とユダヤ人、ドイツ・ノイエンドテッテルサウで開催されたルーテル世界連盟協議会 (1973 年) より。

神の唯一性とキリストの唯一性、ルーテル世界連盟、ノルウェーのオスロでの会合から (1975 年)。

ウィローバンク宣言、キリスト教の福音とユダヤ人について、ユダヤ人伝道に関するローザンヌ協議会 (1989 年) より。

ユダヤ人福音主義。2004 年にタイのパタヤで開催されたローザンヌ世界伝道協議会から、教会への呼びかけ。

ケープタウンの約束、信仰告白と行動への呼びかけ、第 3 回ローザンヌ協議会 (2010 年) より。

神のゆるぎない言葉-キリスト教徒とユダヤ人の関係に関する神学的・実践的視点、英国国教会信仰と秩序委員会 (2019 年) より [26]。

結論 (まとめ)

ユダヤ人伝道の歴史は、教会史の中で複雑に、そして時には激動しながら紡がれてきました。この歴史に関連する神学の立場から、ユダヤ人の人口統計、グループのアイデンティティ、伝道戦略、ユダヤ人の信仰における様々な違いなど、研究すべきことが多くあります。すべての伝道は、福音に出会った一人の個人から始まることを思い出すのは良いことです。そのような出会いには、歴史的な洞察、学ぶべき教訓、そして感謝すべき理由があります。この第 1 章は、ユダヤ人の福音との出会いで締めくくられるのがふさわしいと思います。この結びに登場する伝道者は 20 世紀のユダヤ人伝道界ではよく知られた人物でした。

エリックは、正統派ユダヤ人の家庭に生まれました。父親はハマースミス (西ロンドン) のシナゴグの聖職者で、第一次世界大戦中はユダヤ人部隊のチャプレンを務めていました。エリック自身もユダヤ人の大学に入り、1930 年代には東ロンドンで居留地を管理していました。その後、シェフィールドで再定住の担当官として働き、第二次世界

大戦後にはロンドンに戻ってきました。

その後、私生活が乱れて不幸な時期が続いたエリックは彼自身がそれまで信じていた土台や根拠に疑問を持ちました。そして、真実と救済、その答えを探し始めたのです。40代後半のある日曜日の午後、エリックはハムステッド・ヒースに散歩に出かけて友人のキーツの家を訪ねることにしましたが、家には誰もおらず、ドアは閉まっていました。そこで丘の上にあるセント・ジョーンズ・ダウンシャー・ヒル教会に引き寄せられるように歩いて行きました。その時、たまたまそこにいた教会の牧師が話しかけてきて「あなたも来て、私たちの仲間とお話ししませんか？」とエリックに言いました。「私はふさわしくありません、私はユダヤ人です。」とエリック。するとジェイコブ・ジョクス牧師は「私もユダヤ人です。」と答えました。

こうして友情が生まれ、それはジェイコブ・ジョクス牧師が亡くなるまで続きました。ある日、エリックは「他者が私をどう傷つけたのかは問題ではないのです。私がどこを間違ったのかが問題です。」と言いました。「そうだね」とジェイコブ牧師はうなずき「君はパールテシュバ（悔い改めの達人）にならなければならない。」と答えました。

そうです！ユダヤ人エリックはユダヤ人であるジェイコブ牧師の働きによって、自分の人生をユダヤ人イエスに委ねました。やがてエリックはイギリスで国際ヘブル人クリスチャン同盟の会長となり、他のユダヤ人にたゆまず福音を伝えました。彼はユダヤ人のことがよくわかっていたので、ユダヤ人から信頼されたのです[27]。

私たちはユダヤ人伝道の過去の歴史を研究し、今という現実を生き、聖書の保証に基づいて未来の希望を準備しなければなりません。聖書は全イスラエルの救い（ローマ 11:26）と、諸国民の救いが満ちること（ローマ 11:26）、そして、イスラエルの部族から救われた者とあらゆる国民、部族、民族、言語から救われた「大群衆」が永遠に「多様性を持った一致」をすると証ししているからです。（黙示録 7）

これらの言葉において、聖書は深い謎と崇高な実体、すなわち、神の救済計画におけるユダヤ人と異邦人、イスラエルと教会の相互依存と相互関係を示しています。その救済という神の目的を、アブラハム、イサク、ヤコブの神である神の栄光のために証ししようとする営みが、過去のユダヤ人伝道でした。それは今もこれからも変わることはありません。

2022年12月7日 第一章翻訳

（日本語訳：田中身子和子）

第2章：ユダヤ人コミュニティとユダヤ人伝道

トゥヴィヤ・ザレツキー博士

Chapter 2: The Jewish Community and Jewish Evangelism - Dr Tuvia Zaretsky

[英語本文へのリンク](#)

- ・ 全世界のユダヤ人コミュニティを概観する Meet the global Jewish community
 - ・ 世代別からみるユダヤ人 Jewry by generations
 - ・ 宗教からみるユダヤ人 Jewry by religion
 - ・ 地理からみるユダヤ人 Jewry by geography
- ・ 変化する現代ユダヤ人の4つのサブグループとユダヤ人伝道における意味 Four changing contemporary Jewish subgroups and their implications for Jewish evangelism
 - ・ 無宗教型スピリチュアル層 Spiritual but not religious (SBNR)
 - ・ 伝統的権威よりも個人的体験 Personal experience over traditional authority structures
 - ・ ミレニアル世代：ユダヤ人としてのアイデンティティの変化 Millennials: A change in Jewish identity
 - ・ ユダヤ人と非ユダヤ人の結婚とユダヤ人伝道への影響 Implications of Jewish intermarriage for Jewish evangelism
- ・ 世界のユダヤ人伝道 Jewish evangelism around the world
 - ・ イスラエル Israel
 - ・ フランス France
 - ・ イギリス United Kingdom
 - ・ 旧ソビエト連邦（ロシアとウクライナ） The former Soviet Union, specifically Russia and Ukraine
 - ・ ドイツ Germany
- ・ まとめ ・ Summary

第3章：神学的考察とユダヤ人伝道

Chapter 3: Theological Considerations and Jewish Evangelism

-ダレル・ボック博士、エリヤ・コーエン、グレッグ・ハッグ、ライアン・カープ、シャーロット・マチャド、ジェニファー・マイルズ、ロバート・ウォルターによる寄稿
-Dr Darrell Bock, with contributions by Elijah Cohen, Gregg Hagg, Ryan Karp, Charlotte Machado, Jennifer Miles, Robert Walter

[英語本文へのリンク](#)

- ・重要な用語 Key terms
 - ・ユダヤ人伝道 Jewish evangelism
 - ・イスラエル Israel
 - ・民族と国家としてのユダヤ人 Jews as a people and a nation
- ・イスラエルが神にとって重要な理由 Why Israel matters to God
 - ・イスラエルへの契約（アブラハム、モーセ、ダビデ、新約）における神の約束の言葉 God's word of promise in covenants to Israel (Abrahamic, Mosaic, Davidic, and New)
 - ・ユダヤ人として、またイスラエルのメシアとしてのイエス Jesus as a Jew and as Israel's Messiah
- ・現在の議論 Current Discussions
 - ・イスラエルの状態に関する教派のおよび福音主義的立場とユダヤ人伝道への影響 Denominational and evangelical positions on the state of Israel and the impact on Jewish evangelism
 - ・宗派を超えて：米国における福音派クリスチャンの調査 Beyond denominations: Polled evangelical Christians in the United States
 - ・ケープタウン決意表明 The Cape Town Commitment
 - ・現在の状況と一連のアプローチ The current situation and array of approaches
 - ・イスラエルの救いを含む神の和解のプログラムの重要性（エペソ 2：11-22）と教会と神の民にとってのイスラエルの宣教的および神学的重要性 The importance of God's program of reconciliation involving Israel in salvation (Eph. 2:11-22): Missiological and theological significance of Israel for the church and God's people
 - ・土地に結びついた質問とイスラエル国民の将来の役割 Questions Tied to a Land and a Future Role for National Israel
- ・結びのメモ：伝道への呼びかけ A concluding note: Evangelism remains the call

第4章：ユダヤ人伝道に対する10の反論への応答 -リチャードハーベイ博士

Chapter 4: The Top 10 Challenges Facing Jewish Evangelism and How to Respond
-Dr Richard Harvey

[英語本文へのリンク](#)

- 1・難しすぎる！ It's too hard!
- 2・私にはユダヤ人の友人がいません I don't have any Jewish friends.
- 3・答えがわかりません I don't know the answers.
- 4・私は反ユダヤ主義になりたくありません I don't want to be antisemitic.
- 5・ユダヤ人とクリスチヤンの関係が悪くなる It's bad for Jewish-Christian relations.
- 6・伝道しないようにと言われました They have asked us not to evangelize
- 7・効率が良くない、費用がかかる It's not cost effective.
- 8・イエスが帰って来た時に彼らは皆信じるでしょう They'll all believe when Jesus returns.
- 9・彼らはモーセの律法を守ることで救われます They are saved through keeping the Law of Moses
- 10・結論：答えよりも多くの質問？ Conclusion: More questions than answers?

第5章：ユダヤ人伝道における戦略と実践

-スーザン・パールマンとアンナ・ベス・ハヴナー

Chapter 5: Strategies and Initiatives in Jewish Evangelism

-Susan Perlman with Anna Beth Havenar

[英語本文へのリンク](#)

- ・古典的な戦略 Classic strategies
 - ・弁証学 聖書翻訳 聖書の配布 Apologetics Bible translations Bible distribution
- ・地理を基にした戦略 Geography-based strategies
 - ・イスラエル国外のイスラエル人 Israelis outside of Israel イスラエルのロシア系市民 Russians in Israel
- ・特別な社会集団 Unique demographics
 - ・超正統派コミュニティ Haredi communities

- ・ユダヤ人学生のミニストリー Jewish student ministry
- ・季節的 Seasonal 祭の食品配布 Holiday baskets
- ・二重のアイデンティティ Dual identity
 - ・LGBTQ とユダヤ人 LGBTQ+ Jews
 - ・ユダヤ人と異邦人のカップル Jewish-Gentile couples
- ・デジタル伝道 Digital evangelism
 - ・ポッドキャスト、チャットミニストリー、SNS ソーシャルメディアでの交流、デジタルコンテンツ Evangelistic podcasts Chat ministry Social media engagement Digital content
- ・放送 Broadcast
 - ・ラジオ テレビ 映画 Radio Television Film
- ・人道支援活動 Compassion strategies
 - ・貧しい人々、麻薬中毒者 Ministry to poor and addicts 診療所 Medical clinics
- ・その他のアイデア Other creative venues
 - ・喫茶店 視覚芸術と舞台芸術 ゲストハウス カウチサーフィン Coffee shops Visual and performing arts Guest houses Couch surfing
 - ・キャンプミニストリー 子どものミニストリー Camp Ministry Children's ministry
- ・ユダヤ人伝道団体間の戦略的協力 Partnership as a strategy for Jewish evangelism
 - ・宣教師を互いに出向させる 共同プロジェクト 文書類の相互利用 社会活動との連携 Social justice Congregational approach Business as mission
 - ・コングリゲーションとの連携 事業を通じた伝道 Sending workers to one another Joint projects Utilizing one another's materials
- ・未来に向けて One last look at strategy—a glimpse into the future
 - ・今後のユダヤ人の伝道を想像する Imagine Jewish evangelism going forward...
- ・まとめ Conclusion

参考文献：さらに学びを深めるために - リッチ・ロビンソン博士

For Further Reading -Dr Rich Robinson

[英語本文へのリンク](#)

- ・イスラエル、シオニズム、および置換神学 Israel, Zionism, and Supersessionism
- ・ユダヤ人宣教団体と伝道活動 Jewish Missions and Evangelism
- ・イエスのユダヤ性 Jesus
- ・キリスト教神学と実践のユダヤ性 The Jewishness of Christian Theology and Practice
- ・護教論 Apologetics
- ・メシアニック運動 The Messianic Jewish Movement
- ・聖書注解 Bible